

千代田まちづくりサポート事業 助成グループアンケート調査結果

2008年11月15日

財団法人まちみらい千代田
千代田まちづくりサポーターズクラブ

I 調査の概要

1. 調査の目的

千代田まちづくりサポート事業10周年に当たり、現在当事業により助成を受けているまちづくり活動グループの活動状況や当事業に対する意向を把握することにより、今後の当事業のあり方の検討に資することを目的とする。

2. 調査項目

- (1) グループ・活動内容の概要について
- (2) まちづくりサポート事業が、グループの活動に果たした役割について
- (3) 助成を受けてからのグループの活動の変化について
- (4) 活動を通して最も「うれしいと思ったこと」、「感動したこと」や「心に残った言葉」について

3. 調査対象等

- (1) 調査対象 平成19年度に当事業の助成を受け、平成20年度にも助成申請が可能なグループ
- (2) 対象件数 12グループ
- (3) 調査方法 アンケート調査票の郵送配付・郵送回収
- (4) 調査期間 平成20年4月25日～5月23日

4. 回収結果

- (1) 郵送件数 12
- (2) 有効回答 9
- (3) 有効回答率 75.0%

5. 特記事項

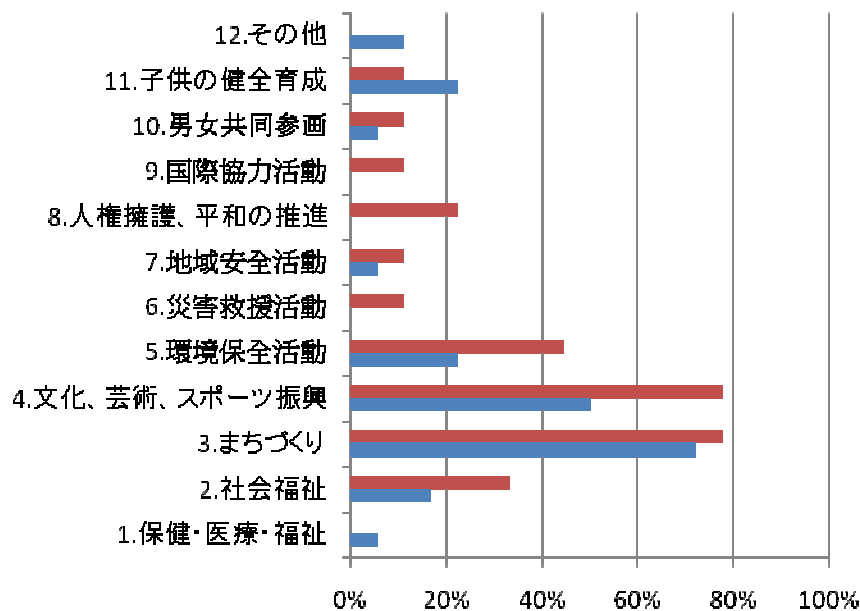
調査の設問は、2003年7月実施の「千代田まちづくりサポート事業助成グループアンケート調査」との比較を行うため当該調査と同一である。なお、設問には助成終了後に関するものがあるが、当該設問の集計は行わない。

Ⅱ 調査結果の要約

03年調査と比較しつつ調査結果を要約する。

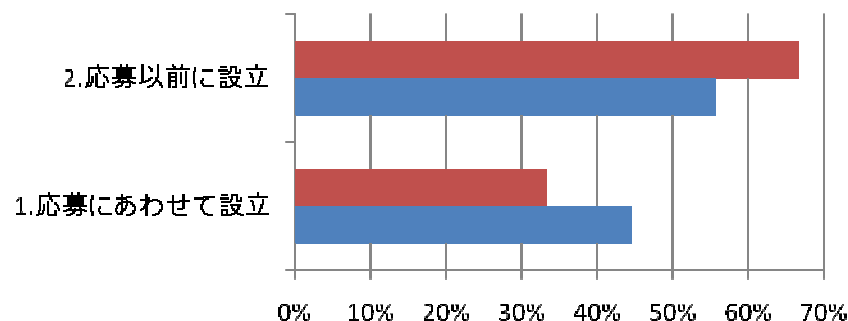
1. グループと活動内容

(1) 活動内容



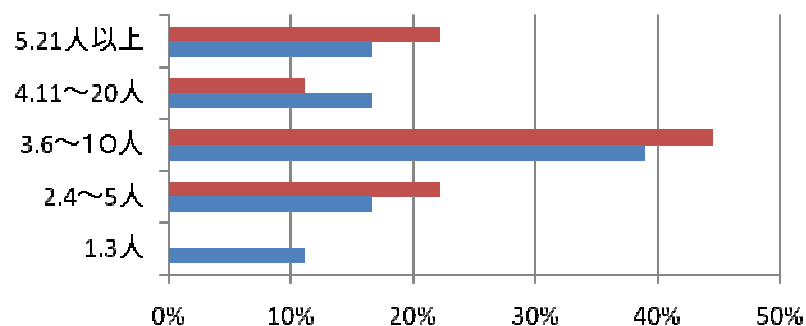
○「まちづくり」、「文化、芸術、スポーツ振興」とする回答が各7件で最も多い。6グループは、双方を活動分野として回答している。
03年においても、この二つの回答が一、二番目に多い。
一方今回は、03年には見られなかった「災害救援」「人権擁護」「国際協力活動」を活動内容とする回答があった。

(2) 設立時期



○応募以前とする回答が6グループ(67%)で、03年の56%よりも多くなっている。

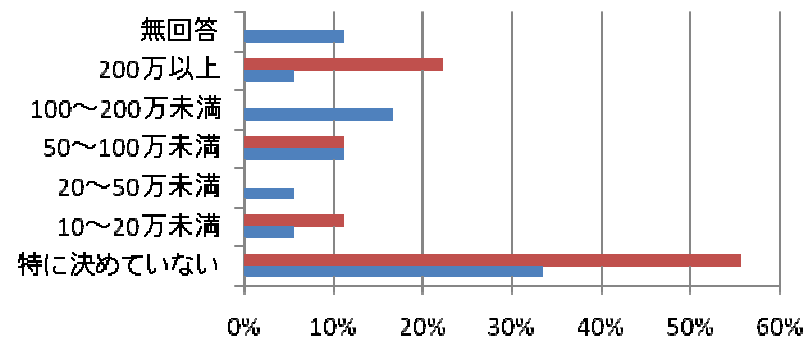
(3) 活動人数



○「6～10人」のグループが44%で一番多い。03年は38%であり大きな変化はない。

■ 今回
■ 03年

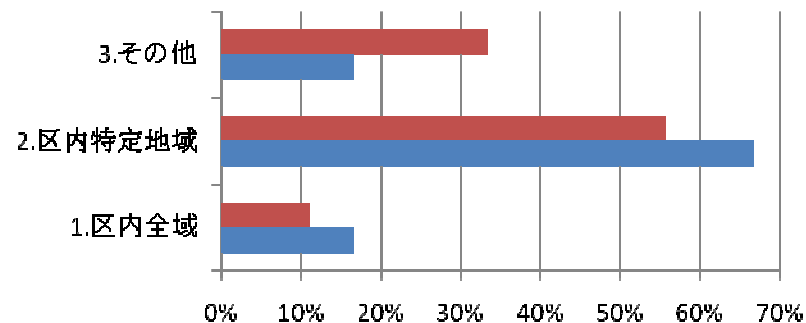
(4) 予算



○「特に決めていない」とするグループが5グループで、過半数となっている。03年は年間予算を決めているグループが、過半数であった。一方、「年間200万円以上」とするグループも2グループあった。

■ 今回
■ 03年

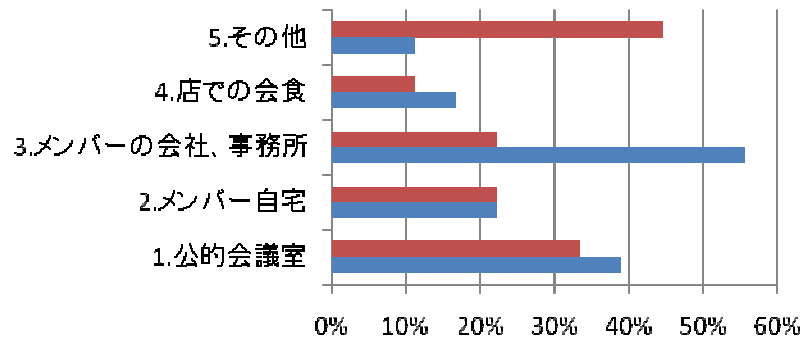
(5) 活動エリア



○活動エリアを「区内特定地域」とするグループが5グループで過半数(56%)である。03年は67%であったので、若干減少している。

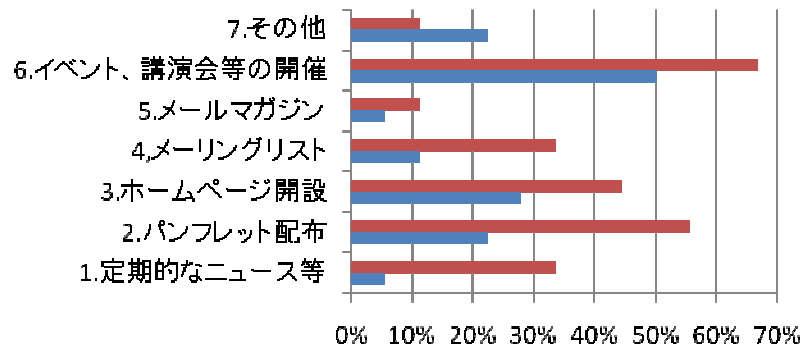
■ 今回
■ 03年

(6) 活動拠点



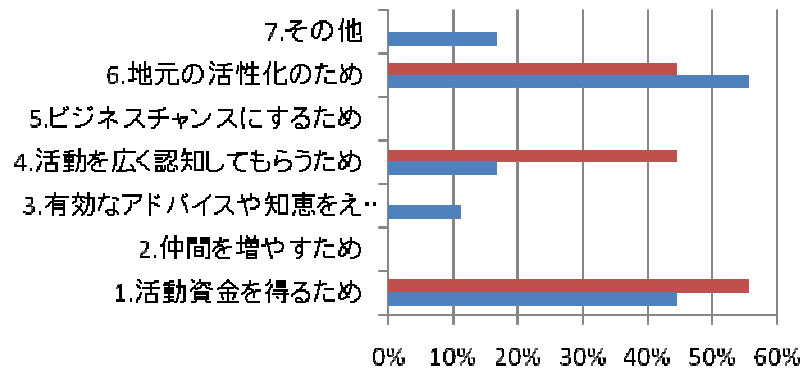
○1/3のグループが「公的会議室」をあげている。その他は、学校、文化施設、JICAなどである。03年度は、メンバーの会社、事務所とする回答が56%あったが、今回は22%に減少している。

(7) 情報発信の方法



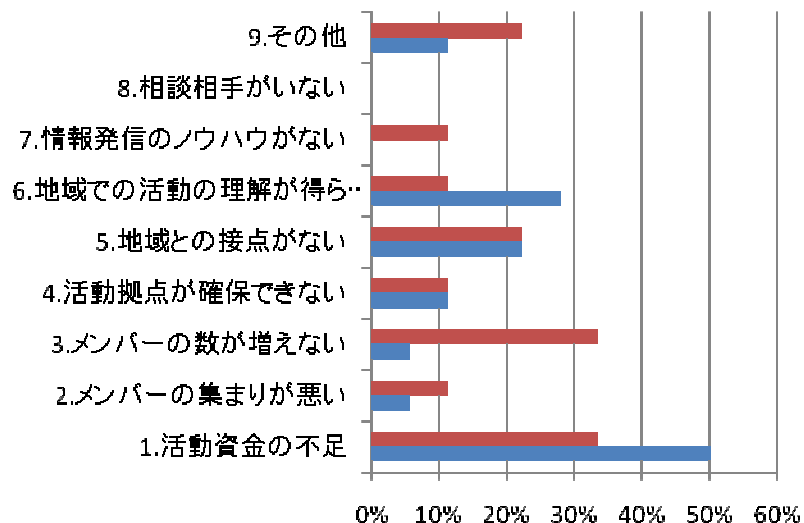
○「イベント、講演会等の開催」が多いのは03年も同様であるが、「パンフレット配布」「ホームページ開設」も高い割合であり、その他ITを使った情報発信等、情報発信方法が多岐に渡ってきている。

(8) 応募のきっかけ



○応募のきっかけは、「活動資金を得るため」「地域の活性化のため」が多いのは、今回も03年も同様であるが、今回は4割を超えるグループが「活動を広く認知してもらうため」と回答していて、大幅に伸びている。

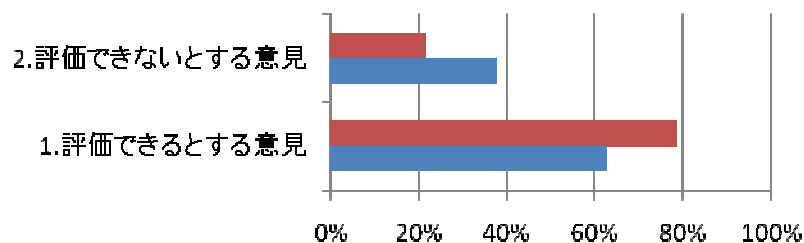
(9) 活動中の最大の課題



○1/3のグループが「活動資金の不足」、「メンバーの数が増えない」をあげている。03年は、半数のグループが「活動資金」をあげており、「地域での活動の理解が得られない」が続いている。「メンバーの数が増えない」とするグループは10%に満たない。

2. まちづくりサポート事業の役割

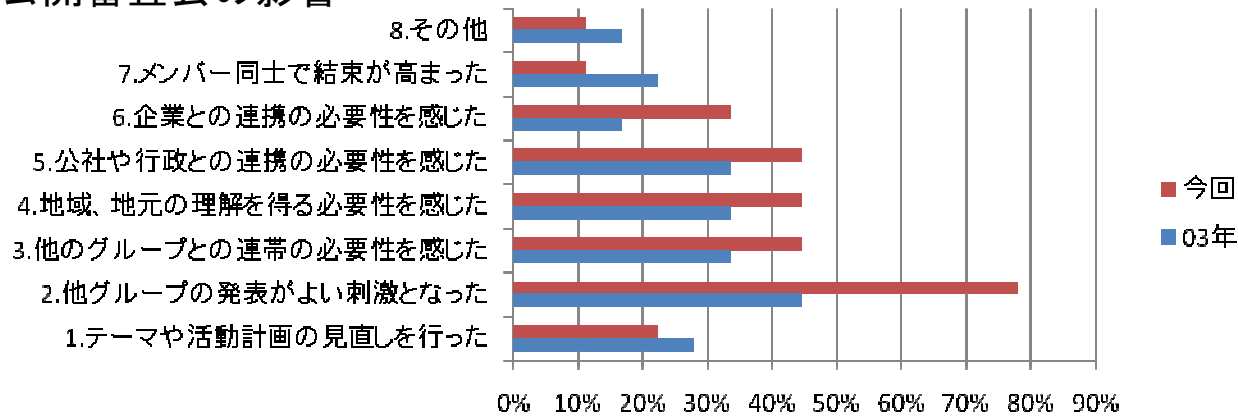
(1) 公開審査会の評価できる点と評価できない点



○公開審査会の評価できる点としては、他グループの発表を参考にできる、オープンで評価内容が明確、自分たちを客観的に見ることができなどがあげられており、これは03年、今回とも共通である。

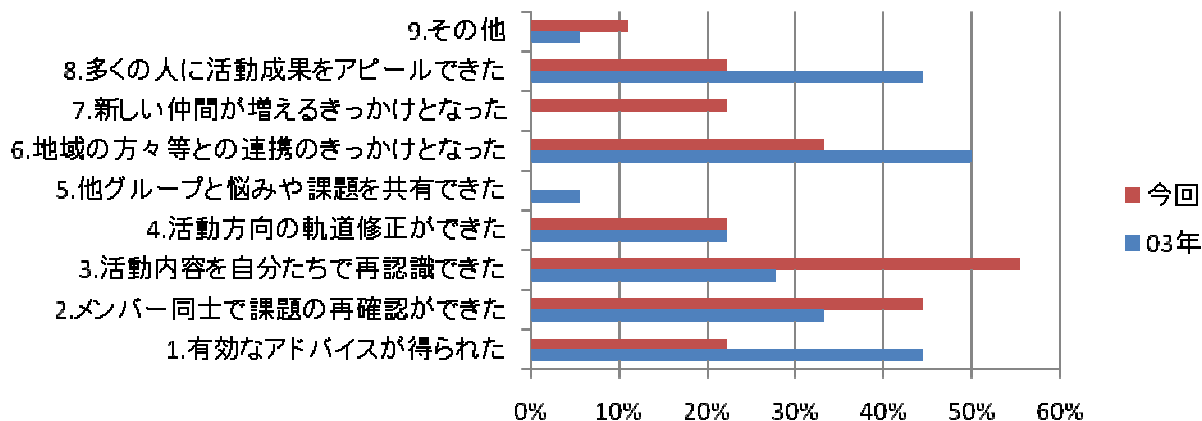
○評価できない点としては、1グループ当たりの審査時間が短すぎるなどの指摘があった。03年には審査委員に関する事項や審査会の時間がかかり過ぎることなどの意見があった。

(2) 公開審査会の影響



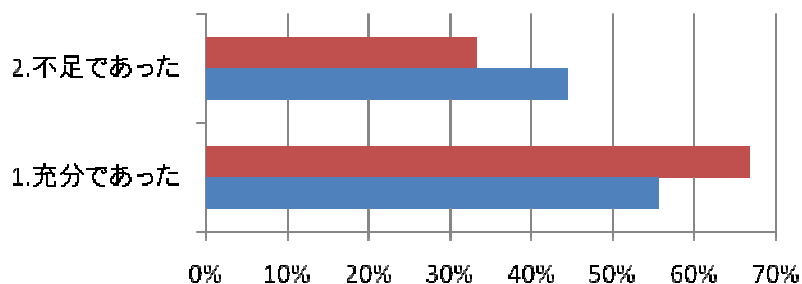
○公開審査会の影響として、8割近いグループが「他グループの発表を聞くことにより刺激を受けた」と回答している。その他の回答の傾向は、03年と大差はない。

(3) 中間発表会、成果発表会の影響



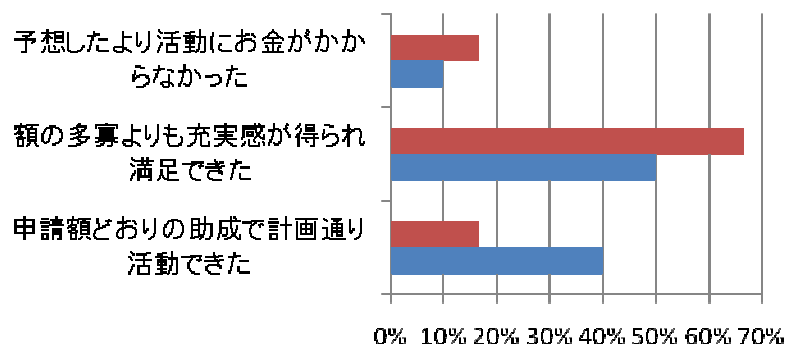
○中間発表会、成果発表会の影響については、過半数のグループが「活動内容を自分たちで再認識できた」と考え、「メンバー同士で課題の再認識ができた」も4割強あった。03年は、半数のグループが「他のグループや地域の方々と連携するきっかけになった」と考え、「有効なアドバイスが得られた」「多くの人に・・・活動を・・・アピールできた」も多かった。

(4) 助成金の額について



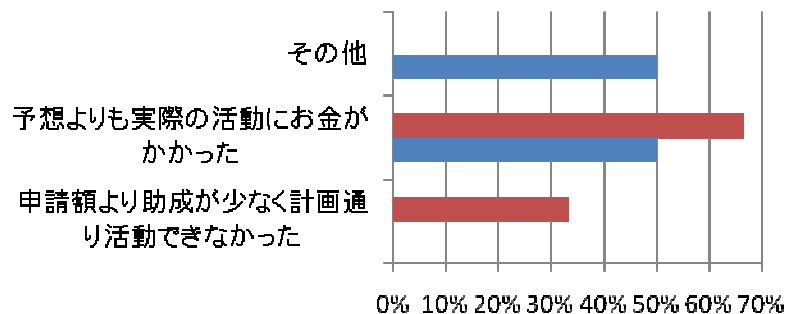
○「充分」と考えるグループが67%、「不足」が33%であった。03年は「充分」が56%、「不足」が44%であった。

(a) 充分であった理由



○充分と考える理由は、今回の方が03年よりも、充足感が得られたので満足とする回答が多くなっている。

(b) 不十分であった理由



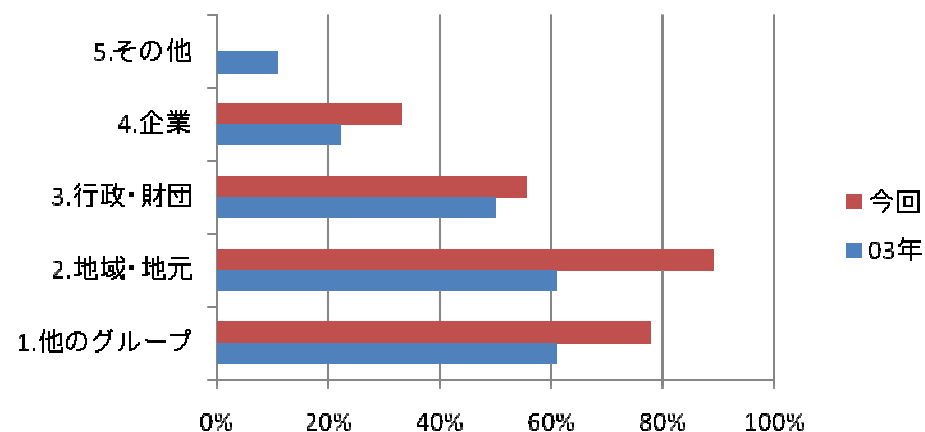
○03年の「その他」は、「継続的に質の良いプロジェクトを行うには足りない」、「先を考えた活動を行おうと思うと不十分であった」などである。

3. 助成を受けてからの活動の変化

○助成期間中の活動の経年変化については、今回の調査対象が1グループを除いて助成1年目のグループであったため、把握できなかった。

○対外関係の持ち方については、他のグループや地域・地元に関しては積極的に働きかけ、多くのグループが係わりを持っている。行政等ともそれなりの係わりがあるが、企業と係わりを持ち何らかの成果を挙げたグループは、03年調査で22%、今回調査でも1/3しかない。

全体的には今回調査の方が、03年よりも対外関係を多く有している。



○企業との係わりの内容は、「企業用地の貸借を申し入れ、無償により貸借できた」「新保町ツアーを企画し、小学館と三省堂の協力を得られた」などである。

4. 活動を通して最も「うれしいと思ったこと」、「感動したこと」、「心に残った言葉」

○活動を通じて触れ合った人々との交流に心を動かされている内容は、今回と03年で大きな変化はない。以下、今回の調査から各グループ1件を記載する。

①街を歩いていると商店街の方や、仲間によく会います。なんだか住んでいる街より人のつながりを感じます。「応援してるよ！」そんな言葉が嬉しいです。一緒に活動できなくても、いつも見守ってくれる気がします。いちばん人に会い、触れ合えるのが「本と街の案内所」です。本と一緒に探したり、おいしいお店を教えたり、この街の楽しみ方を教えあったりとても楽しい出来事です。なんといっても「ありがとう」という言葉。一番のごちそうです。

- ②Eボートに乗船して外濠をクルージングするイベントを行った際、帰りがけに子供がお母さんに発した「また来たいな」という一言、この言葉にかわるほめ言葉はないのではないかというくらい、嬉しい言葉でした。活動をやっていて本当によかったなと思えた瞬間でした。
- ③幼稚園生が国の違う人でも外見が違う人でもバリアなく、受け入れ、初めて知る情報にくらいついてくる。その真剣なまなざし、驚きとわくわくするような感情を表現し、ユニークな質問を次から次へとあびせる、そんな光景を目の当たりにすると、活動の意義を実感できる。また、後日送っていただく感想文などにも感動いたします。
- ④イベントを通して、さまざまな団体とともに協働した活動を行えたこと、また、イベント終了後、商店街の方々のよろこんでいる姿や、感謝のお言葉をいただけたこと。
- ⑤活動を通していくつかの問い合わせや新聞にもとりあげられ、興味をもった賛同者がいらっしやっただことはうれしかった。また成果発表会において、地図の内容についてよくできているとお褒めいただき、他のエリアも引き続き作成し、成果品として販売することを勧められたことは、この活動を認めていただけて報われた思いでした。
- ⑥神田の街の為に一生懸命やってくれてありがとうと地区の老人の皆様にとって頂き、この街は住民であるわれわれがしっかりとしたビジョンをもって活動をしなければと思いました。
- ⑦「まちづくりサポート」事業があることで、地元の地域団体が活性化していること。千代田区の予算を有意義に活用しているとおもった。(助成金の)額自体は、他の事業と比べると少ないにも関わらず効果は大きいと感じた。
- ⑧いろいろありますが、運営等にボランティアとして参加してくれる人々がたくさんいることが最大の発見であり、感動であります。

Ⅲ 調査結果の分析

1. グループと活動内容

- ◆ 「災害救援」「人権擁護・平和」「国際協力」といった03年には無かった活動が新たに出てきた。また、情報発信手段として「ホームページ」「メルマガ」「メーリングリスト」とITの活用が増加している。これらから、活動が時代の流れとともに変化する様子が読み取れる。
- ◆ 活動中の最大の課題は「活動資金の不足」であるが、「メンバーの数が増えない」とする回答も同数あった。03年には、「地域での活動の理解が得られない」や「地域との接点がない」が「活動資金の不足」に続いていた。また、応募のきっかけとして、「活動資金を得るため」に続き半数近いグループが「活動を広く認知してもらうため」をあげ、03年に比べ大幅に増加している。03年は、応募のきっかけは「地元の活性化のため」が最も多く、「活動資金を得るため」が続いていた。
これらから、03年の助成グループは、その関心や思考の対象がグループの外に向かう（地域の理解・接点、地元の活性化）のに対して、現在の助成グループは、それらがグループの内に止まる（メンバーの数、活動資金を得る、活動を認知してもらう）傾向があると考えられる。
なお、このことが助成グループの活動にどのような影響をもたらすかについては、本調査からは推測できない。

2. 「まちづくりサポート」事業が果たした役割

- ◆公開審査会については、評価できる点と評価できない点の数の比は11：3であり、評価できる点の割合は80%弱である。03年でも評価できる点の割合は60%強であることから、公開審査会は助成団体にとっては意義のあるものであることが確認できた。
- ◆中間発表会、成果発表会については、「活動内容を自分たちで再認識できた」「メンバー同士で課題の再認識ができた」と、グループのあり方を再認識する場としてとらえている。03年には、「他のグループや地域の方々と連携するきっかけになった」「有効なアドバイスが得られた」「多くの人に・・・活動を・・・アピールできた」などととらえていた。
両者を比較すると、ここでも、現在の助成グループは思考が外に向かわず、自らのうちに止まる傾向があることが読み取れる。

3. 助成を受けてからの活動の変化

- ◆他のグループ、地域・地元、行政・財団との係わりと比較して、企業との係わりが少ない。この企業との繋がりに関してサポートが必要と考えられる。

4. 活動を通して最も「うれしいと思ったこと」「感動したこと」「心に残った言葉」

- ◆活動を通じて得られた感動をベースに、新たなコミュニティの形成につなげていくことが望まれる。

以上